

## 10億人の民主主義

インド全州、全政党の解明と第13回連邦下院選挙

広瀬崇子編著



インドという「国民国家」が21世紀にどのように実容していくのか?—人口10億人、有権者数が6億人を超える「世界最大の民主主義」インド政治の全体像を浮き彫りにする。

お茶の水書房 定価(本体5100円+税)

広瀬崇子編著

## 『10億人の民主主義』

お茶の水書房 2001年 365ページ

高橋 麻里

インドは10億以上の人口をもつ民主主義国家である。「民主主義」と名乗るに当たり、いくつかの条件が伴う。その中の1つに、普通選挙が行われていることが挙げられる。

本書は1999年に行われた第13回総選挙を分析した研究書である。前回の1998年の第12回総選挙の際には同じグループが『6億人の審判』という形で研究を行ったが、それはいくつかの重要な州分析がもれていた。今回の『10億人の民主主義』はその内容が詳細度を増している。

インドは1952年から普通選挙を行ってきた。いくつかの改正はあったものの、現在は18歳以上の男女に選挙権が与えられている。路上生活者にも非識字者にも選挙権は与えられる。投票の際には、全ての政党・無所属候補者に与えられている特定のシンボルマークが目印となり、投票が行われている。選挙は小選挙区制で行われ、下院議席545議席のうち大統領指名による2議席を除く、543議席が争われる。また、選挙区には指定カースト選挙区、指定部族選挙区がそれぞれ、79、41ずつ設けられている。指定カーストや指定部族とは、ヒンドゥー社会における「不可触性」と、社会的経済的「後進性」と「未開性」を基準とし、憲法第341条、342条で定められているコミュ

ニティを指す。憲法第330条、及び第332条は、その該当者に留保議席を設けることを規定している。こういった特徴をもつインドの選挙の総合的分析は、本書のように多数の研究者が協力して初めて可能となる。

本書の構成は次のようになっている。

## 序論

第I部 主要政党

第II部 主要争点

第III部 外国の反応

第IV部 州

この本について特筆すべき点は、全州(当時、全25州)の選挙結果、及び選挙状況が執筆されていることである(第IV部)。主だった州のみを挙げて分析するのではなく、全州を網羅した本は日本はもとより世界でも初めての試みという。さらに強調したいのは、全政党をカバーしている点である(第II部)。現在、インドで全国政党として認定されている政党は国民会議派、インド人民党、インド共産党、インド共産党(マルクス主義)、ジャナタ・ダル、大衆社会党、そしてサマター党である。それ以外は地域政党であり、それらが数え切れないほどある状況下で、1議席でも獲得した政党は全

て掲載されている。

各パートをみていきたい。

まず第Ⅰ部であるが、ここでは5章に分かれ、インドにおける4つの主要政党と、先に述べた地域政党が分析されている。第Ⅱ部では、安全保障政策、外交政策、経済政策の3つの面から各政党の選挙綱領をもとに分析している。第Ⅲ部ではパーキスタン、中国、周辺諸国の、選挙に対する反応をみている。国内事情にとどまらず、主要周辺国の反応をもみることは、本書の有意性をさらに助長させているものと考えられる。また、第Ⅰ部からⅢ部は全国レベルでの分析といえよう。そして第Ⅳ部は、前述のように全25州が網羅されている。州単位での分析である。インド研究者は、たいていインド国内に特定の専門地域を抱えており、それぞれが各州の分析に当たった。総勢21名の南アジア研究者の共同執筆となっ

た本書、特に第Ⅳ部は、「各州政治への入門書」と呼べるものである。

このような州単位での分析は、現在のインドにとって重要になってきた。なぜなら、91年以降の経済自由化政策とともに、「州の政策が注目を集める」ようになってきたからである。州政治は中央に影響を及ぼす存在である。その「州」内で宗教・カースト・言語によってそれぞれのコミュニティが形成されてきた。中には優勢カーストや、強力な勢力をもつ組織も存在する。有権者は自分たちのコミュニティに利益を与えてくれる候補者を選ぶ。立候補者、政党はこれらの票を集めるために、政策を練っていくのである。

以上述べてきたように、本書は、インド国内状況、特に州レベルの政治を理解する上で、きわめて重要な研究書であるといえる。